

特41

996

清佛台栗宅  
笑談  
松香



滑稽笑談 佛船粟毛序詞

粟毛の驍足一時千里夫母のあらぬ藤粟毛二本の足を交るゝ進み進ませ  
 東海道より木曾奥州も言は更なり四國を廻つた猿智慧の彼の彌次郎兵衛  
 此へ越向し基く滑稽笑談馬で行れぬ浪の上乗組漁船を粟毛一代へ弗  
 郎品への烟人が趣く支那の戦争見物趣向の古きを温る物から穿つ文辭の  
 新しきと知との大しと味噌の揚やう辛い積で書て見れたまは是れ甘い  
 澁い方が辛い顔をむなさるゝともお笑ひあらば作者の本望此上もあき大  
 慶幸福粟毛の驍足あらねども一時千里舟賣私め馬で行れぬ海外まで漁  
 船で積出し大儲けと此版元の懇張まで併せて茲再記しとていよく之が  
 開巻で御坐イッ

明治十七秋十月

伊東橋塘記

滑稽 清佛 粟毛 初編

東都 橋塘伊東專三戯作

第一回

蒸瀛車の瀛笛一聲とユ一ウと言間に數十里を走り電信機ハピン〜と打  
間に數百里の外に至る何て早いを旨とすれば昨日の事を今日見るさへ  
未だもどろしと思ふ所から今日の事を今日見るやう今日新聞といふを  
出すなど有り寶母や文明開化といふ物の目面と掴むせしき物然るが中  
よも能樂と此世を渡る歌金者あり所の淺艸藥研堀母芥子面弗郎兵衛芥子  
面品八といふ二人あり世帯の事の苦み成らで荷よなる物の我身躰は職と  
言るの何もなく讀書算盤毫も知ねば奉公などおの皆目出られを然とく人  
力を受くも力が無けきば夫もならず左様なら營業を初んか夫え資本が

青島本長三初編

無ければ出来を寧の事ふ持たが病の怠惰癖をば資本よして遊んで消光が  
 増で有らうと只ぶら〜と大罽丸が鉤掛つゝ様である今日も主個の弗  
 郎兵衛の十時すぎまで朝寐をして起ると其儘楊枝を叩へ朝湯へ出掛た其  
 あとで食客の品ハガぢむ細工の飯持へ 品「備これで飯の出米たといふ  
 物どが汁の實れ無ふの閉口しと折から戸外へ八百屋の賣聲ハ「ハイ今日  
 のよろしう御坐イ 品「オツト八百屋ウ待無山と摘菜は少くんねへオイ夫  
 でよし錢の茲へ置せ和主是から何方の方へ行ハ「モウ裏を廻りましと  
 ら通へ出く横町の方へ行ます 品「然か夫じやアお安の御用だが角の鹿嶋  
 (酒屋)へ寄て三合計持て来いと吩咐くくんねへトサア是で飯も汁も膳立  
 も出来と弗さんも早く歸つて来ればいゝア、否だ〜孫子の代までも食  
 客のさせねへ事ごと佛々翻しながら火鉢へ火を起して居所へ弗郎兵衛  
 の手拭を下て浮羅りと歸り来り 弗「品公飯の出米たかオツトよ〜」

寸朝酒に一杯やりてへな 品「其様な事の皆まで給ふな吾儕今朝つら〜  
 と天文を伺ふ所ろ此盃洗ふ鎮星の閃く影の虎の一天大方酒を吞たがるど  
 らうと思つゝ鹿嶋へ三合然言くやつとオヤ尊としゝゐる中モウ来と小僧  
 御普勞徳利のお坐敷へサア被爲入られませうと先此方へ持て来て 品「何  
 の被のと言やすが夏の冷酒は限りやすと突然コツアへ次でグイと呑み  
 品「故人曰く朝酒の質を置て呑めト成々然もありあん然もさうぞ空腹の  
 せへう五臟六腑をキリ〜と巡る所ろの御膳上等泥固〜おい、心  
 持此奴の強氣だと又一杯次に掛る徳利を弗郎兵衛の引たくり 弗「エ、此  
 徳棒の能加減は慈戯て置け食客の分在を持て三錢五厘の酒と然我浮〜  
 と飲れて溜る物か吾儕さんざア今朝一杯飲ふと言のの外じやアねへ講釋  
 子の貞山の假聲を違ふ様どが容易ならざらん幾が之有るに依てだ 品「へ  
 ン弗さんひう真面目母堅くる〜重箱へ印紙状貼て所判を押した様母四角

お出掛に喰客く〜と澤山さうに言て貰ふめへ和主が代々戸主の彌次郎兵衛の後胤なら吾儕を代々金箔附の喰客北八の後胤の品八ど然安くして貰ひますめへ弗「是さ〜何も其様は真赤に成て怒る事も有めへ吾儕も彌次郎兵衛の後胤お主も北八の後胤だといふの〜何も〜裏店に計り燻ぶつてゐても感心しねへら先祖の業を繼で一番旅へ出掛やうといふ趣向品「十二旅か旅の結構旅の取にかき捨旅の道連世の情といふ事が有か〜直と出掛るとしやうじやアねへ〜先最初の東海道といふ氣組だらうが蒸氣さんざアいけねへせ三菱の切符を買て直乗の直行のい〜々れど夫の用足る何かの時で衰微してゐても何でも海道筋を五十三次品川川崎神奈川と日和むんじよ母歩行たり或は馬や人力車でお練で行的がい〜ごらうぜト言のも弗さんあんざアモウ其作面相の上母老込と来居から詮方がねへが此品さんと来り一体全体自然法体と美男の好男子とお生さすつ

たうら上等の華族のおひイ様中等の藝妓娼妓の名有俗列品下等と言た所ろが商人家の箱入娘といふ様な者をみんな毛多附せ〜るのだから是で旅へでも出掛れば半分の色修行も持込の〜其所でちやんと聞置〜への〜と此時弗郎兵衛の手酌でグイ〜飲ながら弗「エ〜喋々と能く饒舌男が吾儕達の先祖の世の中の開けねへ中へ出て来た人間だらう東海道と〜木曾街道とか内地計を〜廻つて夫で天狗に成てゐたが今や文明開化の大御代其様少〜事じやアいけねへ吾儕はまづズツと日本の地を離れ支那地方へ漫遊と出掛る氣だと言れて品八怪現な〜品「オイ弗さん和主氣でも違やア〜ねへ何のため母支那なんぞへ行の〜弗「コレ〜夫がから其方あどの共に語は〜足ざる所ろの虫野郎煙野郎と言ざるを得ざる野郎だ〜品「オヤ〜生意氣母何ういふぜ隣りの旦那に輸入自由は借て見やがつて假名の附〜論説を拾ひ讀ふよむ物だから否に物識振て岩旅

が繪様だなんぞつて夫よりう見様聞様言様と言く庚申の日母帝釋様一益  
 煎餅でも賣行た方がい、どらう、弗「コレ」又混つ反しやアがる其様  
 亦少事で支那へ行ふといふので、無の容易成らざらん幾が有之ふ依くだ  
 品「又貞山の假聲う先生今日にいよ」敵を打ませうか 弗「エ、混むよ  
 聞け」エ、其所で此貞山 品「何貞山とい」弗「エ、和主が混るら釣込  
 れていけねへ其所で此支那へ行ふといふの外の事でもねへ豫々新聞  
 も出てゐる、佛蘭西との談判が破き佛軍が突然奇く舞籠を取らせいふ事ど  
 から何弱い勝尾でも黙止るる氣違ねへのサ然すると是ら大戦争が  
 初らア其所で吾儕が其戦を見に行ふといふのだ 品「其奴何より面白い  
 が和主何處で聞て来々 弗「ナニ今湯歸母金有家の隠居の前を通り掛ると  
 隠居が吾儕を呼込で今日の新聞云々出くあるが和主も品さんも遊んで  
 計るゐるも彌次北の後胤と生ま々甲斐もなうらうら支那へ行くと見て来

まの如何だ瀟車賃や入費の吾儕が如何でもしくやると言きたるら夫で行  
 氣ふ成たのよ 品「御膳」然いふ金主が附きへすりやア二人とも新しい  
 洋服促装で日本の色男風を支那まで吹してやらねば成らねへ先前祝ひ母  
 一杯と猪口傾ける其所此門口へ達て来たの本町小住む道込屋悪兵衛と  
 いふ半可通五時四十五分頃ある越後上布のケバ立たる帷子を着下襦袢の  
 晒布あから半襟丈の中を廣く淺黄襦子を掛地の赤くなり紋の黒く成たる  
 緞の羽織を引掛山の入た博多の帯へ私して時計持參致ひの見せ掛ふア  
 ルミの鎖を巻附夏の足の裏から油が出まいいけぬら下駄の之ふ限りやす  
 といふの南部の高い故、竹の皮の表附き麥藁帽子の昨年の和製狀開襦  
 堂で洗濯させたクタクの代物蝙蝠傘の勸工場で高い時分母七十五錢し  
 る出さぬ物なればそろ／＼日が差込といふ是も五時何十分といふと差一  
 中節の名弘に貰つて未だ義理をやらぬ少お扇子半開き母して遣ひ都く

此男の何母も知ねど何でも知らふり伏する生意氣なり門口うらエヘンエ  
 へン黄色い膚で 愚「弗郎君御在座かな 品「来させ〜」 弗「ごきや 品「本  
 町の文盲爺がぬねへと言ふ 弗「何詮方がぬへ此方へ上ねへ 品「遠慮さ  
 んお這入ませへ 愚「ハ、品君もお宅うさお二人お揃ひとのお珍しいテ  
 と言ふがらズツト上へ上り 愚「一列以米とヤしとい程打絶て居とく拙も  
 一寸伺なれば成ぬ所ろどが兎角季候が暑寒運轉致まので暑邪と寒氣母  
 犯させ全快致まかと思へば本腹し本腹まるかと思へば平愈し夫に依て亂  
 鬢剃鬚の姿甚太恐れ入とテ 弗「へ、エ暑寒が運轉〜本腹が平愈する  
 との實に御愁傷様お次第です望混つ反〜も少も解らま 品「私し〜また  
 虎刺列病でも取附きてお出さるかと思つてゐや〜た 愚「イヤ其御心配  
 なら御無用でゲス拙などの毎日の食事うら〜く注意致して惘然と致さぬ  
 物の喰ぬやう母致すうら決して電信病おどの怒いの御坐らぬテ 品「惘然

と被仰のハ矢張判然と温泉と間違る格式ですか 弗「エと黙然とゐると叱  
 り附ると這愚もハツと氣が附て是の〜まつとりと思ふ所うら今の失策を  
 まぢくなえんと 愚「ナニ電信病と被仰のハ、恐き入や〜お電信病の  
 種々譯の有事で 弗「へ〜世間でのコレラ病の事の傳染病とやしますが  
 愚「イエ〜あまの傳信病が本統で御坐るテ物と云物の理詰を物でソレ  
 君方も御存じの通り電信機といふ機械の致で電線をピン〜とさへ打ば  
 北海道や長崎の果の替の外國へまでも用が通じませう其所て此コレラ病  
 など、いふ病も被傳信ほど早く傳染ので夫だからアレを傳信病と言やす  
 何と理詰究めと物じやア御坐いやせんか是などの皆之れ西洋の究理學者  
 がげふかうふ依り持へた物で御坐るテと眞面目腐つて鏡吉母と弗郎兵衛  
 品ハハ可笑さが溜らざれど特と感心〜と顔を〜 弗「ハ、ア成程夫てハ  
 矢つ張傳信病の方が本統で 愚「左様〜 品「先生今何とか被仰たエ〜ア





ノげふかうどの何の事で御坐ります 愚「是の品大人も似氣もあくげふ  
 かうを御存し御坐らぬか是の氣が附きや一たあア先けふうとやすと  
 と早く言ば 品「遅く言ば重賢とても成ますうあ 愚「混るの御免は蒙り  
 ませう僕が車輪でげふううの講釋を致しまするら 弗「左様く 愚「借此  
 日本人の如何の物り猪路つかで大い機械などを持ゆる事が出来やせ  
 んが其所へ行て西洋人などの強氣者で蒸氣船なり傳信機なり鑛道を  
 馬車あり考え初ると自分一代で出来ねば子の代子の代で出来ねば孫の  
 代品「孫の代で出来ねば彦の代彦の代で出来ねば玄孫の代玄孫の代で出  
 来ねば奇砂子の代奇砂子の代で出来ねば 弗「エエ五月端如何乗馬飼養令  
 が出て官員方が馬に乗とつて速乗の馬も宜敷といふ様口うらあぶくを  
 出して何状餘計な口を叩くのごモ 這愚さん夫うら如何しやした 愚「然  
 ばで御坐るで其所で西洋人の二代も三代と掛り業の功を積で傳信機など

は發賣するうら夫て是を僥功と申すのサ 品「由縁と聞ば有難い僥倖  
 が業の功を積で發明は發賣する様も成たの合むいがかえや一ふ成く腕  
 カとい夫の力と書といふ組うねと側うら附々言くと本人の晒蛙晒蛙まじ  
 まじ弗郎兵衛の餘り母氣の毒ふさり外の話しお紛うさんと 弗「先生今日  
 の大さうお早ふ御坐いますか是うら何處へうお出でサスカ 愚「左様サ今  
 日の日曜と申し種々用事無て柳橋の石八へ参らふと思つてをるが平常  
 宅よをれば来客ふ貴附られ偶の日曜の外用が溜り實母何道にても樂いさ  
 せやせん寶母五十把百把で壓制雷全の次第で御坐るテと諱らぬ事をいふ  
 弗「萬八の又例の書畫會で御坐るうな 愚「イエく左様を雅のある催ほ  
 いで御坐らぬて豫々君方も御存じなる日本橋の院よし藝妓梅本のお園  
 が今度宇治の名を取やして宇治崇保と改名の披露會サ其所で生かどん不  
 常最員に一と招てやりまた朋友の繪入自由の雜賀柳香や自由燈の渡邊文

京や改進新聞の若菜貞尔なども一寸行くやるといふので是うう行積りサ  
 を間違た事をいふ 弗「フウお園の會といふの先々月じやア御坐いやせ  
 んうを一本つゝ返さ 愚「でいたうナハテ面妖を夫の惜い事をした何でも  
 今日ぞぞ思つくるたが書畫會や花會やさうひあどの事日く二十も三十  
 も持おまきるので前後散逸致すの閉口ト少一ひるんだが胡魔化す了簡  
 愚「まづ何れうのと言やすが日本橋のお園のい、藝妓でゲス年の未だ行  
 むけきど萬事取廻しのい、女サ品「モシく這愚さん日本橋のお園の年  
 の行おの藝妓じやア有やせんぜ年をしと大姉株ですぜ 愚「ホイ又違つた  
 左様く一年をいとお園の何サあの何々柳橋のお園サあれのねへ生の素う  
 ら能知くるる能藝妓さ全体あまの以前新橋で園助と言まゐやいた 弗「其  
 園助が今の日本橋のお園で柳橋のお園の昔しうら山口のお園サと又一本  
 さめ附らま今度の少一面を深めたがいよく紛らうす了簡で 愚「左様左

様山口のお園が柳橋乃お園で園助はお園が日本橋のお園サ藝妓も多く買  
 やすうら如何うすると間違ていけねへ生が年の行ねへお園と行の何  
 サアノ何エまどうも出ねへ何々芳野のお園く是の若くてい、藝妓サ  
 品「モシく芳野まのお園といふ藝妓の有やせんモシ小園じやア御坐り  
 やせんト又ぞつくり言さ 愚「小園く其小園あまのねへ年が若く極よ  
 う御坐るテ 弗「芳野お小園の若い所トやア有やせんアレの大川端で楠亭  
 といふ待合茶屋と出しくゐた女で年増藝妓の方ですぜト言る、をり母正  
 午れ号砲ズドン 愚「イヤ何を鹿々りしく間違るが間違のぬのドン計りど  
 く是の長坐恐ま入と又伺ひやせう失敬く其所くにして歸りゆく後  
 の宛然大風吹さるあどふ異らむ隣家の時計がチンくくく

第二回

品「ヤレ〜」騒々しくつとアノ位べら〜と間違つと事計りいふ奴も少  
 へじやアねへうノウ弗さん 弗「然よアレも一種の變り者サ 品「其變り物  
 のも蔭で朝飯と食ねへ中母モウ正午に成くいよ〜無帯せいふ次第ウシ  
 テ見まば一うたけ徳が附たといふ物だらう然恐く計も言れぬ〜是より  
 二人の飯と喰と終了と品ハの臺所ろ方へ行たと思ひ外早晚裏口ウ  
 戸外へ出て行〜と弗郎兵衛の少〜知す 弗「オイ品公茲は片附くくんね  
 へオイ品公と呼でも返詞はせざるよぞ 弗「品公何處へ行とだと臺所ろ  
 へ立く行〜え其所ぬぬす 弗「エ〜何處へ行さやアツと食客を置るよ  
 主人が洗ひ物なんぞをしと溜る物うと佛々言ながら膳脱洗ひ終了坐敷  
 へ来〜吸煙のみながら 弗「何〜ろ有難へ先祖の内地とい言ながら生涯  
 旅をして氣樂母過〜たれ〜其後胤を生れて愚頭〜消光てゐるは實に  
 情ない事ごとと思つてゐるが時なるうも時なるうも支那と佛蘭西の戦争こ

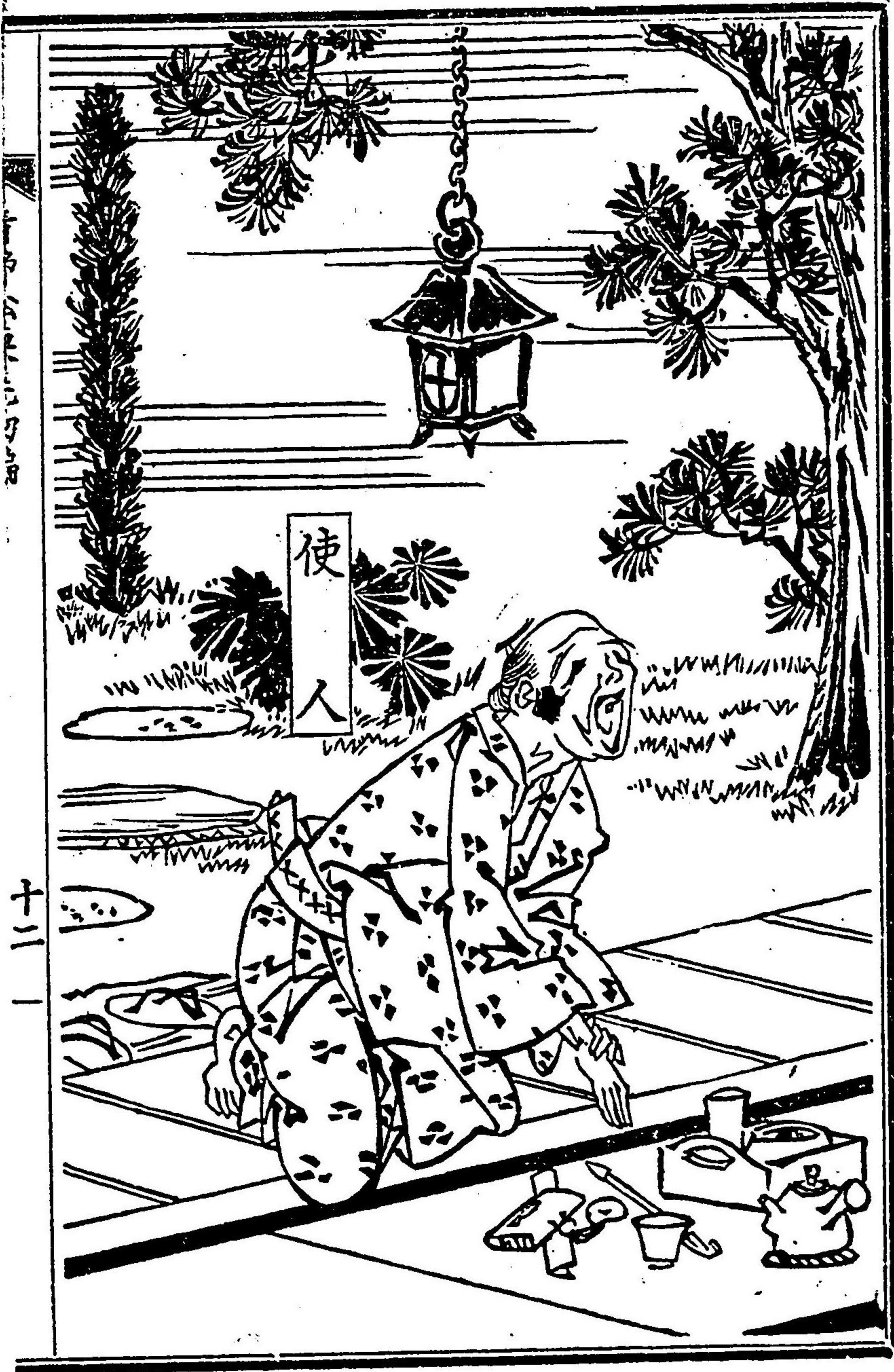
待待ば甘露日日和とい此事だ先づ第一に安心とい金有屋は隠居が金主と  
 来てゐるうら此浴衣一枚で行とも言まい質母這入てゐる時計は身受も出  
 来洋服も今の夏服といふ譯どが途中で季候が代るう又戦争が長引ば何ま  
 であゆり解らぬぬゑ冬服も是非入る道理是も一揃の持へて貰ひ皮盤提の  
 護護靴靴らせ黒の高帽子で意氣揚々と新聞社の特派通信者が實地探偵と  
 言様〜見世掛時事新報の本多孫四郎報知新聞の尾崎行雄も吾儕に叶ぬ  
 へといふ面で大威張で行ねば成ねへ夫母附くの鼻は下ふ疑があくて不  
 都合が今が今直〜疑は生る方ねへ〜知ん毛生樂といふ乃が新聞は廣  
 告は出てゐるが夫も然早くの生やアしめへ生なけりやア詮方えねへが支  
 那へ行とら戦争の中へ飛込で日頃強氣を見せ武藝勇力が顯しとら芥子  
 面弗郎兵衛の強氣な物なればを歸朝の上母陸軍少將う何う採用され正  
 何位とら從何位とら任せらる新華族の中へても列せられ、ば占た物だ

ア、斯いふ身体再成と知たら詰らねへ女おんぞに引掛らむに劍術でも習  
つて置ば能つた惜い事としたく何でも故でも此節の武張た事でなくつ  
ちやアいけねへ夫お支那へ行てもぶらん散お弗郎兵衛じやア氣がきうね  
へうら設し向ふお奴が聞らう何と言ふ第一名おらして強くなるくくの強さ  
うに聞えねへ強い名の何が能うらう斯つと日本で強い名の誰ごらう日本  
で強くつて支那まで名お通つてゐるおの王く加藤主計頭清正是なら大丈  
夫ごうら加藤主計頭清正は後胤で加藤何としやう清正乃清お字を取て加  
藤清兵衛夫にいけねへ清兵衛といふと商人じみるから清太郎としやう  
清太郎もいけねへボン太郎を間違るごらう手附す母清正は轉倒て正清  
せしやう然すれば先祖が清正公大神儀と祀らきてゐるうら吾儕も死だ後  
に正清公小神儀位に祭られるごらう其清正公く實に清正公の強  
い南龍は講釋おんぞで聞ても慰山は籠城などの感心を物だイヤく清正

いけねへく清正は終了母毒候頭を喰て死ぬから縁起が悪いく吾儕  
も支那へ行く惠体お分らねへ物でも喰せられ候頭と討死でもするおの否  
だ義經が強いおら義經にしやう義經の身が軽くつて能義經ハ腹飛と米と  
日母の御膳上等だ而して静おんぞといふ權妻を抱へる所らおんぞを見り  
やア義經は限る義經くイヤく義經もいけねへ縁起が悪い功の有ても  
罪を蒙り腰越おら進返されて奥州へ欠落し竟お行方が知なく成た手もあ  
く今れ世界で言やア徵兵を驚く奴さんご逃亡をする格で是が發覺れば大  
變だ吾儕も何ば人乃金おの言おがら餘り支那で違ひすぎ歸つて来ても金  
有家お門口おら追歸され奥州乃方へでも欠落とする様お事での感心しね  
へおら義經もお廢だテ然すると強い大將の誰だらう元龜天正は頃世乃中  
麻お如くお亂れ天下を望む者二十八人是を二十八天下といふ其中へ尾張  
お片隅うら歌乎を飛出して内大臣とまで成らおの織田上総分平お信長だ

其信長だ、信長の強氣だ第一後に太閤秀吉と成り木下藤吉郎が家諱ふ  
 するら強氣者ぞイヤ、信長もいけねへ京都本能寺で明智乃為に殺  
 されさから縁起が悪いエ、夫で誰しやう長壽と、天下を取て而て  
 強いおの誰だらうオ、有々權現様權現様なる大丈夫と應仁以来亂きてあ  
 た天下を治め酒井神原井伊本多などといふ家諱が有て自分の長壽をして  
 子孫の十五代も續た此様愛度大將の先夫で徳川弗郎兵衛源家康  
 を名乗ふ然ど、獨言ひとり軍人氣取も成てある門口うら「へい御免  
 おせへ弗郎兵衛様と被仰の此方おね 弗「オイ弗郎兵衛の此方だが誰だう  
 知ねへが明て這入ねへ」夫だろ御免ノウ下せへと格子を明ておづ、  
 這入上へ登り「吾儕ハア砂村新田の西期平様お宅から頼れて来やしと  
 が和郎乃伯父様お西期平様乃お神さんで有く見れば早く言は和郎乃伯母  
 さんお様な者も當るお尻古さんが子へ 弗「エ、此男の何が田舎者だつと

餘り氣が永過り了砂村に伯父公お所うら言れるを氣も成ア何でも郵便  
 で用を言て遣す伯父公がささ、使ひ遣すア伯母公に何か變つた事  
 でも有たおトヤアねへか氣に成て成ら格へ早く言てくらすし「吾儕も早  
 く言ふ可いおの思ふけれど歩行て来るので咽喉がヒツ附まなんねへ何卒  
 茶を一杯くらすツせへ 弗「儲々厄分お使どんだサア茶ヲ吞ねへ」お有難ふ  
 御座るア、能茶だア吾儕が在所なんざア茶チウ物の日待お外よア飲ま  
 ねへうら偶母茶を飲ま甘くツ溜んねへモウ一杯下せへへい、有難  
 ふお御馳走様です日中の戸外の暑くつて叶ましねへ 弗「和主の定めし村  
 お衆だらうが伯父公が茲まで使遣す母人力車賃の呉なるつたかエ「吾  
 儕全に村お者で常から西期平どんお懸意にすお物だから主弗郎兵衛が所  
 まで突走つてくれせへ是の甚太失敬だが急用ごうら人力車に乗て行く呉  
 ろお人力車賃ノウ下されさが人力車乗てお乗いでも行せへすまば能事だ



何も人々事其様母急事もあんめへ人力車に乗ねば二十錢儲るうら夫  
 て歩行て来やしたのサ弗「いやえや飛でもねへ枝滑を田舎漢もある物だ  
 他人に使ふ頼れく人力車賃を二十錢取て置ながら優々を来るやの途方も  
 ねへ人だ其上母氣が長いを来てゐるのら始末よいねへ主の一体何月生  
 れど「ハア吾儕の天保三百五十六年閏年有る十三月廿三十五日極日  
 が長い重上を亭午頃生まれたもんだのら何でも此子の氣が永かんべい氣  
 が長ければ生命も永かんべい何でえ長へ名をウ附べい其所で考  
 へて見るや吾儕が祖父を親父が七兵衛をいふて七十まで生其又親父が八  
 左衛門をいふて八十まで生其又親父が九十郎助をいつて九十まで生たう  
 ら何でも此名を一所にして附たら二三百まで生るだんべいをいつて七八九  
 十郎助兵衛と附やうと弗「オヤ／＼長いにえ程の有た物だ印刷局の煙出  
 へ上つて其上で階子乘をする程長へ名だ夫の能が其所で伯父公が如何う

しやしたるネ 七「ハイ左様でしたあア外乃諾に實が入て肝腎を用ノウ志  
 れやした其伯父公お神さんで有く見まばおめへさん此伯母公様で弗「  
 エとモウ夫の諱つたかと言すとはいひ 七「ハア夫での言ますまいが其伯母  
 公が産まじた 弗「何だか主おいふ事口を利れが一針抜だら地列たく  
 つて詮方がねへ夫うら如何したおだ 七「其所で伯母公が子を産ごうら主  
 に来てくまチウ使ひだ 弗「伯母公が子産だ夫の目出度年と取てうらお  
 子ごうら伯父公が嚙嬉しがつたらうら 七「イエ然でねへく西期平どんの  
 悲がつて泣て御坐つた 弗「ナニ泣くおた其様解らねへ奴がある物う子が  
 産れと泣なんぞツく馬鹿／＼い 七「ウンにやア然でねへく産癖お惡  
 い女は掛るや亭主乃泣なんぞア幾程も有やツイ此間お事ごが吾儕が村  
 でも三つ兒を産直に喰て仕舞た親が有んで亭主が頻り泣やした 弗「  
 夫やア不思議ご三兒を来りやア本もんど夫が男計りあら金鱗様乃車力極

松櫻とか何とか言れ狂言でしても大達者乃役だがネ昔しの男女混りれ  
 三兒なんどを産と畜生どとか何とか言と物どが今世世界の然じやアねへ  
 兒を澤山産なア徴兵乃目芽で男の子から猶結講だが然しく男うへ女うへ  
 七「夫がハア未だ判然しやせんが多分マア北が三足一柱が四足どつて事  
 ど弗「何北が三足に柱が四足だ訝お言様もやアねへう而て其様ふ澤山人  
 間が産で溜る物う七「ハ、ア吾儕飼犬が産だ子と間違て話しをしやいた  
 是ハア濟務へ事をしやいた弗「エ、大概にしねへ面白くねへ伯母公の  
 事だから此方の心配してあらア然して伯母公の何を産だのだ七「然ばで  
 座坐るてお尻子さんの産だの男でなければ女をんおでなければ男で其  
 所の所ろの確母吾儕の聞く来あうつとが何も男女を言母来たでないで只  
 産れた事べい報知母来たのだから男う女うと無利に聞く権利もあるめへ  
 し吾儕が方でも何てえ彼でも言ねば成ぬといふ義務チウもねへ物だ弗「

此奴の否に筋張て漢語なんどと違やアがる産の報知も来母男う女う知す  
 母来といふ奴もねへ物ど文盲爺め七「吾儕文盲爺で有りましねへ人間で  
 座坐るテ弗「解つとヨく行事の行けれどん吾儕の今度急お支那の戦争  
 へ行あくつちやア成ねへ様も成たるら其仕度や何うで聞しくつて成ねへ  
 跡から行と言く和主先へ歸つてくんねへ七「夫アハア承知しやいとが成  
 程支那の戦争チウの大騒ぎだと今朝の間に學校の教員さんが被仰たが和  
 郎さん支那何しお行だへ斯見た所ろが別に強い人でもお一月給を貰つ  
 てある軍人でもねへ事どあらハア主等おんざア支那へは日唐の事だ  
 ら戦争ア僥倖は靴の古いのや刀の折なんどを拾いお行れだんべい然し  
 く見まば日本でいふ焼原乃釘拾いといふ格うノウ弗「田舎者の癖は相應  
 よ口れ悪い籠棒だ吾儕なんざア陸軍の御大將お採用しやうと言きたのも  
 否だつて斷る程の軍人だ靴の古いのや刀の折を拾いお行奴が有るもれか



七「ハ、ア威張るも陀目だ主等が支那へ行たつて第一言葉が分んねへ然  
 しく道え知めへ然ば通り町で小便所ノウ探すやうに虚路く歩行てゐて  
 巡査までも掴るもんだテ 弗「コレ失敬な事をやすお斯見えても弗郎兵衛  
 様なんざア今迄は世界中を幾度歩行て来たう知やアしねへや夫だりら支  
 那語でも英語でも佛語でも廓詞でも大和言葉でも枕詞でも何でも漢でも  
 知てゐゆのだ其所で支那へ行た所ろが何處のら何處へ出る道は如何で其  
 所母に井戸が幾千有る掃溜が幾千あるまで心得るゆのぞ 七「ハア夫じ  
 やア主の支那の衛生掛でも爲た譯るね 弗「衛生掛の事じやアねへ博識  
 多才れ大先生文武兩道の達人だから五大洲の兵隊が喇叭と茶流女羅で寄  
 て来て尻とも思えねへだ 七「夫だらハア主の本統は西洋や支那へ行し  
 ったのか 弗「行たともく支那西洋の魯な事東洋のら南洋のら北洋まで  
 行て来たのだから何處で何を何といふまで確乎心得るるテ先スート

ヘルと言のが烟草の事でいしくといふのが團子の事で然がますと言の  
 が然で有りますといふ様な事だ 七「是ハア恐れ入た物だ如何うお諸序  
 は主が西洋や支那を歩行て来た話一ノウして聞いて貰ひてへノウ 弗「何  
 吾儕が萬國を歩行た話しか夫の譯へねへ極譯へねへから今度の支那へ  
 行事なんざア隣りの家へ行やうな物だと大法螺を吹立るお田舎漢の真と  
 思ひ 七「どうも魂消たコンダ主の様母大した人が最期平どんの甥ッ子ふ  
 有るとア吾儕ハア少も知んだそんだら是非その話をちくどん計りて  
 下せへ 弗「オ、能とも能とも能とも然らば吾儕が萬國を歩行た古今飛切れ珍聞  
 を話もいやうが初編の餘白があくならつたらら委細事の二編目じやく

滑稽 清佛船粟毛初編終

明治十七年九月廿五日御届

明治十七年十月廿五日出版

定價金十錢

編輯人 東京日本橋區本石町壹丁目廿六番地 伊東專三

出版人 東京京橋區元數寄屋町三丁目七番地 三嶽寬隆

同賣人 東京京橋區南傳馬町三丁目九番地 松成三三

賣捌所 各御最寄書店

東京麹町區飯田町三丁目拾九番地

印刷所 東京金玉出版社

右之外府下町々々時々賣捌人を差廻し并れに作求あらん事を希ふ



清佛台栗毛

第  
初  
編

特41

996

091771-001-4

特41-996

清佛台栗毛

川上 鼠文

伊東 専三 / 著

M17-18

DBO-0252

